様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３０００１７

研究課題名（和文）東南アジア島嶼部における国境管理レジームと境域社会の変容―地域間比較の視点から

研究課題名（英文）Border Control and Trans-Border Societies in Insular Southeast Asia: From a Perspective of Comparative Area Studies

研究代表者
長津　一史（NAGATSU, Kazufumi）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：２０３２４６７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,800,000円

研究成果の概要（和文）：島嶼部東南アジアにおける国境の政治的意味は、第二次世界大戦後、様々に変化してきた。その過程で国境を跨ぐ境域社会もまた、自らの文化やアイデンティティを変容させてきた。本研究は、現地調査を基に、同地域の境域社会では、①跨境社会文化圏を部分的に含む国民国家との交渉を通じた再編、②在地の跨境社会文化圏を枠組みとする復興、③非在地の越境的な社会関係（欧米のNGOとの関係等）を基盤とする創造の三つのパターンで文化・アイデンティティを変容させる傾向がみられることを明らかにした。同時に、変容の志向性が移民世代や階層によって異なること、またひとつの社会に複数の変容パターンが併存しうることも指摘した。

研究成果の概要（英文）：In Insular Southeast Asia, the political meanings of national border have frequently changed in accordance with the regional and global politics since the 1960s. How have the people in the trans-border societies reorganized their culture and identity in such a circumstance? This project revealed that there are three patterns: 1) the people in the border societies reconfigured their culture and identity negotiating with nation-states which enclosed part of their transnational socio-cultural zone; 2) they revitalized their culture and identity based on the network in the transnational socio-cultural zone they have traditionally lived; and 3) they invented their culture and identity through the interaction with the “non-indigenous” transnational network (i.e. the network with U.S. based NGO). The project also pointed out that there are different patterns of cultural and identity reorganization in a trans-border society depending upon the immigrant generation or class.

研究分野：東南アジア研究

キーワード：東南アジア　国境　境域社会　地域間比較　民族再編　越境移動

１．研究開始当初の背景

島嶼部東南アジアの国境は、言語文化や民族の分布ではなく、欧米の植民地勢力が引いた恣意的な政治境界線に由来する。そのため同地域には、社会文化的な圏域が国境を跨いで広がる境域社会（border society）が多数、存在する。かれらの社会文化的な圏域は、植民地時代から、各国民国家が独立を果たした時代を経て現在まで、国境で分断されてきた。

他方、島嶼部東南アジアの国境の政治的な意味に目を転じると、それは時代によって異なることがわかる。同地域の国境は、1960 年代から 80 年代までは、各国家が国民統合を進めつつ確立すべき支配の枠線であり、ときに隣国との対立の最前線であった。冷戦終結後は、「国家間の協力と対立」および「開放と囲い込み」というそれぞれ相反するベクトルを内包するものとして再構築された。

このように国境の政治的意味が変化する過程で、境域社会もまた、経済面のほか、文化や民族アイデンティティの面できわめてダイナミックな変容を遂げてきた（図１参照）。

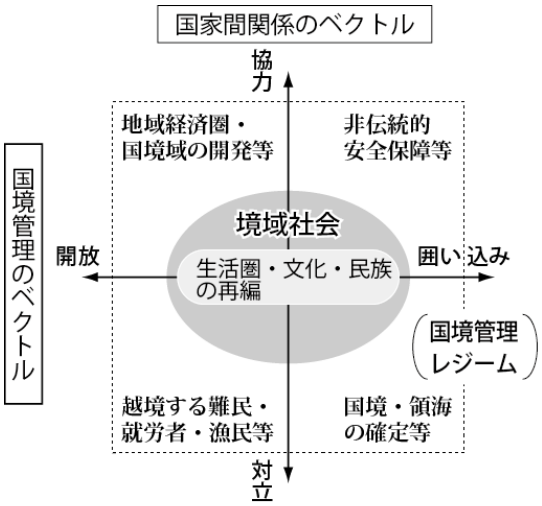

図１　1990 年代以降の国境管理レジームと境域社会（概念図）

２．研究の目的

本研究は、島嶼部東南アジアの境域社会における文化や民族アイデンティティの変容を、国境管理や国家間関係をめぐるマクロな政治的文脈との関わりを視野におきながら動態的に捉え、地域間比較の視点から分析・解明することを目的とした。

地域的な比較の対象は、インドネシア・マレーシア・シンガポールに跨るマラッカ海峡域、インドネシア・マレーシア・フィリピンに跨るスル海域、インドネシア・東ティモル・オーストラリアに跨るティモル海域である（図２参照）。

これら三つ境域社会の人びとは、社会文化圏が国家により分断され、それらの間の移動を国家により管理されている状況において、自らの文化やアイデンティティをいかに変容させてきたのか。そのパターンにはどのような異同ないし地域性がみいだされるのか―これらが本研究の中心的な問いである。

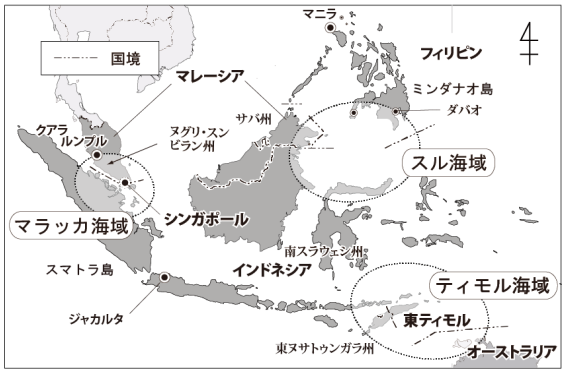

図２　対象とする境域と主な調査地

３．研究の方法

本研究の組織は、「境域社会」のフィールド調査を担当する５人と、「国境管理レジーム」の資料調査を担当する２人で構成された。

境域社会の担当者は、前記した三つの境域のいずれかにおいて定点調査を行った。特に焦点をおいたのは、それぞれの境域で跨境社会文化圏を維持してきた民族集団、すなわちマラッカ海峡域のミナンカバウ出自のマレー人、スル海域のバジャウ人（海サマ人含む）とブギス人、ティモル海域のバジャウ人とテトゥン人である。

担当者は、これらの集団を対象に次の問題群を明らかにすることを試みた。(a)生業・経済活動や文化実践の圏域、(b)親族や地縁、文化属性を紐帯とするネットワーク、(c) 自らの集団や文化に関わる表象・カテゴリー・境界、(d)これらの歴史的な連続性と非連続性。

国境管理レジームの担当者は、インドネシアとマレーシアを主な対象として、次の問題群に関わる文献史料調査を現地で行った。(a)各国ないし各国間の出入国管理、国境警備、難民・越境就労、国境画定等に関わる規範、制度、実践（慣行を含む）、(b)これらの歴史的な連続性と非連続性。

４．研究成果

2015 年度には国際学会 *The First Conference, Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (Kyoto)* において代表者がパネル“Ethnic Re/formation at Margins: Negotiations with Global Institutions, NGOs and Missionaries in Insular Southeast Asia”を組織し、代表者を含む４人のメンバーが成果を公表した。他に、台湾中央研究員国際セミナー（2015 年度）、日本東南アジア学会（2016 年度）、シンガポール国立大学アジア研究所セミナー（2017 年度）でも合同で研究成果を公表している。研究組織全体では、毎年、研究打合せと下記の合同調査を行った。各メンバーは、その議論に基づく成果を後掲する個別の著書・論文等にまとめた。

以下では、本研究における境域社会の理解を提示したうえで、境域社会担当者に絞って研究成果の概要を記す。

【本研究における境域社会の理解】

19 世紀半ば以降、欧米の植民地勢力は、従来の交易拠点の支配にかえて、領域の支配を植民地支配の第一の目的とするようになった。その植民地支配は、マンダラ的な国家群によって構成されていた東南アジアの政治空間を根底から変貌させた。境域社会に関わる変化としては、①地理空間の領域化、②その結果としての地理空間の政治・経済的分断、③分断を示す境界線すなわち国境の顕在化の三つがあげられる。

植民地の領域国家化と植民地の枠組みを継承した国民国家の成立は、従来は存在しなかった排他的な領域と線的で固定的な国境を東南アジア全域にもたらした。

植民地支配と第二次世界大戦後の独立国民国家による国民統合の過程を経て、この地域においては異物だった領域と国境も、東南アジアの政治的文脈に定着していった。しかしながら、ここでの領域や国境の意味は、その外来性と恣意性ゆえに、欧米や日本のそれとはかならずしも同じにはならなかった。

国境についていえば、それは植民地時代はもちろん、国民国家の成立後も、高い透過性を保ち続けた。透過性とは、国家に管理されない人やモノの移動の可能性を指す。そしてそれらの移動は、異物でしかなかった国境の周囲に、独自の社会空間、近代国家の境域と呼びうる空間を生成させた。人びとは、国境に跨がる地理空間に生計と生活の場をみいだし、そこに境域社会を再構築したのである。

本研究が考察の対象としたのは、こうした境域社会における文化やアイデンティティの面での同時代的な変容である。

【各メンバーの調査研究】

■ 長津一史は、マレーシア・サバ州とインドネシア東部（東カリマンタン州、東ジャワ州、南東スラウェシ州など）に跨がる境域に住むバジャウ人を対象として調査研究を行った。この境域はスル海域に含まれる。

サバ州のバジャウ人の一部（海サマ人）は、1970 年代から 90 年代にかけて、マレーシアのイスラーム制度化政策のもと、急速にイスラーム化し、同時に地域における社会上昇を果たした。他方インドネシア東部のバジャウ人も、スラウェシ島やジャワ島出身のイスラーム知識人の影響を受け、同じく急速にイスラーム化した。こうしたイスラーム化は、在地の宗教実践をどのように変えたのか。宗教実践の変容パターンは、国境の両側でいかに異なっていたのか。これが長津の研究における問いである。

サバ州のバジャウ人のあいだでは、イスラーム化はマレーシア国家が規定する「公的イスラーム」の受容というかたちで展開した。その過程では、在地の宗教指導者は周縁化された。また宗教実践からはバジャウ的要素―バジャウ語やバジャウの慣習―が排除され、他方でマレー的な諸要素―マレー語やマレーの慣習―が導入された。結果、ここでは州政府が公認するイスラーム知識人がマレー的な宗教実践を主導するようになった。

他方、インドネシア東部のバジャウ人は、ジャワ島や中東など外来の「正統イスラーム」を導入してイスラーム化を進めつつも、宗教実践のなかにはバジャウ的要素を維持してきた。ここでは在地のイスラーム知識人がバジャウ的要素を含む混淆的なイスラームを主導し続けている。

こうした宗教実践にみる両地域での差異は、国家権力のイスラーム／宗教への関与のあり方や、国家によるイスラーム／宗教の制度化のあり方の差異と明らかに相関している。1990 年代以降のグローバル化の過程で、東南アジアのイスラームは一面ではトランスナショナルな関係性を拡大した。しかし、在地の宗教実践に目を転じると、そのあり方はしばしば国境線で分断され、各国の宗教政策のもとで再編されている。本研究がみたのは、そうした宗教実践再編のひとつの事例であった。

■ 加藤剛は、マレーシアのヌグリ・スンビラン州に住むミナンカバウ出自のマレー人を対象として調査研究を行った。ミナンカバウ出自のマレー人の社会文化圏は、同州とインドネシアのスマトラ島に跨がる。この境域はマラッカ海峡域に含まれる。

ヌグリ・スンビラン州の政治・行政の実権を握るのは、アダット・プルパティと呼ばれる慣習を順守するマレー人である。アダット・プルパティは、ミナンカバウ移民によりもたらされた母系親族制度に基づく慣習である。つまり、かれらの文化的ルーツは、隣国インドネシア・スマトラ島のミナンカバウにある。ヌグリ・スンビラン州のマレー人は、国境の向こうにある自らの文化的ルーツと歴史的にどのように向き合ってきたのか。これが加藤の研究における問いである。

マラヤ連邦が成立した 1957 年から 1960 年代半ばまで、ヌグリ・スンビラン州のマレー人は、マラヤ／マレーシアとインドネシアとの政治的対立等のため、インドネシア起源の文化的ルーツに親近感を示すことはできなかった。かれらがそうした文化的ルーツを強調するようになるのは、1960 年代末から 70 年代半ばにかけてのことである。

この時期、近代化や都市化、選挙民主主義を背景に発言力を得たマレー人の若者が、アダット・プルパティを封建的であると批判した。それへのマレー人指導者の対抗策が、アダット・プルパティは 600 年も前にミナンカバウからもたらされた「由緒正しい」伝統であると、公の場で語ることだったのである。

1990 年代から 2000 年代になると、マレー人の若者の向都移動はさらに加速した。高齢化と農業放棄が進んだ農村では、実生活におけるアダット・プルパティの経済的意味は失われ、女性相続が問題視されることもなくなった。州行政を中心に現在推進されているの

は、マレーシアの観光政策を後ろ盾に、アダット・プルパティをヌグリ・スンビラン観光のブランドにしようとする試みなのである。

■ 青山和佳はフィリピン・ミンダナオ島ダバオの海サマ人（バジャウの下位集団）を対象として調査研究を行った。同研究は、長津が研究対象とするマレーシアとインドネシアのバジャウとの比較を念頭においている。青山は、海サマ人居住区における災害（火災）とその後の住民の移転にともなう生活空間の創出に焦点をおき、その様式が国家間でいかに異なるのかを検討した。

その暫定的な仮説のひとつは、調査地の海サマ人の居住地移転と生活空間の創出は、より善き生を求めて利用可能な諸資源や機会をめぐってなされるのではないか、というものである。

従来のサバ州やインドネシアのバジャウ研究は、かれらの集住の理由として生態環境への適応を指摘することが多かった。しかし、ダバオの海サマ人は、都市の市場経済という社会を生き抜くために、より価値のある諸資源や機会をみいだしつつ、移動・移住を展開していると考えられたのである。

また青山は、イスラーム化が進行する他地域のバジャウ人とは異なり、ダバオの海サマ人のあいだでは、ペンテコステ派キリスト教への改宗が集団的に進行していることも明らかにした。キリスト教を海サマ人にもたらしたのは欧米の宣教師で、かれらは貧困者支援の NGO のメンバーでもあった。

青山は、海サマ人のキリスト教への改宗を、フィリピンという枠組み―周辺者に対する公的支援は脆弱であるが、キリスト教団体をはじめとする民間の支援は発達している―における、周辺者の「開発資源」へのアクセスの問題として対象化し、その構図をまとめた。

■ 伊藤眞は、マレーシア・サバ州に居住するブギス人を対象として調査研究を行った。かれらの社会文化圏は、故地であるインドネシアの南スラウェシから、ボルネオ島東岸を経てサバ州に至る海域に広がる。この境域はスル海域に含まれる。

サバ州ではブギス人は移民と位置づけられている。同州のブギス移民、特にその第二世代は、サバ州で自らの集団的地位と生活圏を確保していくために、どのような民族団体を形成し、そこに関わってきたのか。これが伊藤の研究における問いである。

ブギス移民は第二次世界大戦以前のイギリス植民地期から、北ボルネオ／サバ州にいくつかの民族団体を形成してきた。ただし民族の相互扶助や連帯を意識した活動は、1985 年に政府認可を受けたサバ・ブギス福祉協会（PKBS）においてはじめて本格的に行われるようになった。同会を主導したのは、ブギス移民の第二世代であった。

ブギス移民の第二世代は「ブミプトラ（土地の子）」というマレーシアで優遇措置がとられる民族的地位の認定を目標として、サバ州の歴史におけるブギスの役割を強調し、文化活動に参与し、ブギスという表象の更新に努めてきた。一方、個人的なレベルでみるならば、かれらは移民の第一世代とも第三世代とも異なる曖昧性のなかで生きてきた。

第一世代の移民にとっては、異郷の地であるサバ州（北ボルネオ）にどう適応するのかが至上の課題であった。第三世代はすでにマレーシア／サバ社会に適応同化し、安定した状態にある場合が多い。しかし第二世代は、マレー（シア）人であることとブギス人であるという二重の位置づけを日々、往復し、転換しながら生活しなければならない。

ブギス人団体 PKBS では、新来移民への支援等が講じられることはない。第二世代の移民は、自分たちと「不法移民」との連続性をできるだけ隠そうとするからである。同団体で常に優先されるのは、サバ州内でのブミプトラとしての社会的地位の確保である。

第二世代のブギス移民は、上記のような緊張とジレンマのなかに置かれている。その立場が、こうしたブギス人団体のあり方やその政治的性格を規定してきたのである。

■ 福武慎太郎は、東ティモル共和国とインドネシアの東ヌサ・トゥンガラ州西ティモル県に跨がる境域に居住するテトゥン人を対象として調査研究を行った。この境域はティモル海域に含まれる。

第二次大戦以前、西ティモルはオランダ領東インドの統治下にあり、東ティモルはポルトガルの統治下にあった。こうした植民地支配から、2002 年の東ティモルの独立に至るまでのマクロな政治状況のもと、どのような言語文化圏がこの境域に生成・再編・維持されてきたのか。これが福武の研究における問いである。

東・西ティモルでは、それぞれ異なる宗主国が植民地支配を行い、異なる修道会が宣教を行ったにもかかわらず、東西国境を跨ぐ「ウェハリ＝テトゥン語文化圏」を中心に「カトリック化」が進行した。結果として、もともと国境を越えて広がっていたテトゥン社会にカトリック教会が強い影響力を持つ在地の言語文化圏が形成されることになった。

こうした国境をまたぐ宗教、文化、人々のつながりは、1990 年代末から 2002 年にかけての東ティモルの独立過程では等閑視されることが多かった。そのため、1999 年の住民投票後に、推計 25 万〜30 万人の東ティモル在住者が「難民」として西ティモルに避難したことは、国際支援団体等にとっては理解しがたい現象にみえた。

しかし、そうした在地の言語文化的なつながりは、独立以前から現在に至るまで―紛争とは別のレベルで―維持されてきたと思われる。そのことは、独立後の 2006 年に生じた東ティモルと周辺域での騒乱が、「東西対立」を

ひとつの背景としていたことからも推測しうる。ここでいう「東西」は、ディリあたりを境界線とする東西の言語文化的な地理区分であり、西側に国境を跨ぐ「ウェハリ＝テトゥン語文化圏」が広がる。

東ティモルに明確な「東」と「西」という集団的なアイデンティティが存在するわけではない。しかし、その差異は、将来的な政治的な対立のなかで、東ティモルの国民統合の不安定な土台を象徴する文化表象として、たびたび姿をあらわす可能性がある。

■ 左右田直規は、「国境管理レジーム」の担当者であるが、文献とインタビュー調査によりながら、マレーシア、インドネシアからマダガスカルにまで広がる「マレー世界」運動の展開と、その歴史にみるマレー人アイデンティティの変容について考察した。

第二次世界大戦前のマラヤ（現在のマレーシアの半島部）、ボルネオ、蘭領東インド、フィリピンには、それぞれ異なったかたちで「マレー（ムラユ）世界」の大同団結を目指す汎マレー主義の思想と運動がみられた。

1960 年代後半以降、汎マレー主義運動はいったん下火になるが、2000 年代から、「マレー世界」の連帯と汎マレー・アイデンティティの復興をめざす政治的な動きが再びみられるようになる。その最も端的な例が、DMDI（「マレー世界・イスラーム世界」）運動の展開である。DMDI は、2000 年にマレーシアのマラッカ州で最初の会議を開催した。同会議には、インドネシア、フィリピンのほか、スリランカやマダガスカルなどの広義の「マレー人」コミュニティの代表（主に政治指導者）が参加した。

DMDI 運動は、基本的には既存の国民国家の枠組みを認めたうえで、広義のマレー人が連携と協力を図ろうとする、国境を越えた「民族運動」のひとつであると理解できる。ただし、運動に参加する当事者たちの動機や思惑には、共通性のみならず、相違性、特に政治的な意図に関する認識の違い—例えばマレーシアの政治指導者はこの運動を自らの政党政治の宣伝の場としているが、他国の参加者はそれに反対している—が少なからずみられることには留意しなければならない。

【まとめ】

全体として本研究は、島嶼部東南アジアの境域社会では、①跨境社会文化圏を部分的に含む国民国家との交渉を通じた再編（マレーシア・インドネシアのバジャウ人、ブギス人、マレー人）、②在地の跨境社会文化圏を枠組みとする復興（東・西ティモルのテトゥン人、島嶼部全域のマレー人）、③非在地の越境的な社会関係（例えば欧米の NGO との関係）を基盤とする創造（フィリピンの海サマ人）の三つのパターンで文化やアイデンティティを変容させようとする傾向がみられることを明らかにした。

ただし、同じ境域社会の成員であってもいずれのパターンを志向するのかは、移民世代や階層によって異なること、また同じ境域社会のなかにも、いまみた三つのうちの複数のパターンが併存しうることには留意する必要がある。

例えばサバ州のブギス人でも、移民第一世代は、インドネシアとのつながりを意識した跨境的な民族アイデンティティを保持していた。また国境を越えるマレー人世界の連帯を強調するのは主にマレー人の政治指導者に限定され、一般のマレー人は文化やアイデンティティをむしろマレーシア国家の枠内に収斂しようとする意識のほうが強いと思われる。

本研究の最終的な成果（商業出版）では、こうした移民の世代、階層、さらには地域ごとの国境をめぐる微細な政治過程の差異までを視野に入れて、島嶼部東南アジアの境域社会における文化やアイデンティティの変容を考察することになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 30 件）

1) NAGATSU, Kazufumi 2017. Maritime Diaspora and Creolization: Genealogy of the Sama-Bajau in Insular Southeast Asia. *Senri Ethnological Studies* 95: 35-64. doi/10.15021/00008578（査読有）
2) 伊藤眞 2017.「イ・ラガリゴ叙事詩への道」『人文学報』、513-2: 1-19（ウェブアクセス無、査読有）
3) NAGATSU, Kazufumi 2016. Social Space of the Sea Peoples: A Study on the Arts of Syncretism and Symbiosis in the Southeast Asian Maritime World. T*he Journal of Sophia Asian Studies* 33: 111-140. http://digital-archives. Sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000036056（査読有）
4) AOYAMA, Waka 2016. Creating Living Space against Social Exclusion: The Experience of Sama-Bajau Migrants in Davao City, the Philippines. *Harvard-Yenching Institute Working Paper Series* 5 January, 2016: 1-43. https://harvard-yenching.org/sites/harvard-yenching.org/files/featurefiles/AOYAMA %20Waka_Creating%20Living%20Space%20against%20Social%20Exclusion.pdf（査読無）
5) SODA, Naoki 2016. Muslim Community Building in a New Town in Malaysia: With Special Reference to the Roles of Surau. *Southeast Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies* 19: 1-16.（ウェブアクセス無、査読有）
6) 本名純 2015.「インドネシアの選挙政治における排他的ナショナリズム—2014 年プラボウォの挑戦」『アジア研究』61(4): 22-41. doi.org/10.11479/asianstudies.61.4_22（査読有）
7) 加藤剛 2014.「『開発』概念の生成をめぐっ

て―初源から植民地主義の時代まで」『アジア・アフリカ地域研究』13(2): 112-147. https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/dl/publications/no_1302/AA1302-01_kato.pdf（査読有）
8) 福武慎太郎 2014.「[総特集にあたって]グローバル・スタディーズ―地域研究の地殻変動」『地域研究』14(1): 8-32.http:// www.jcas.jp/jcasnavi/jcas/14-1-02_jcas_review_fukutake.pdf（査読有）

〔学会発表〕（計 43 件）
1) AOYAMA, Waka 2016. "To Become 'Christian Bajau': The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines." *The 10th International Conference on Philippines Studies.* 12 July, Dumaguete: Siliman University, the Philippines.
2) 長津一史 2016.「東南アジア海民論と二つの比較―地域研究的越境の試みとして」『東南アジア学会第 95 回研究大会』6 月 5 日、豊中：大阪大学.
3) 加藤剛 2016.「趣旨説明 東南アジア海民論と二つの比較―地域研究的越境の試みとして」『東南アジア学会第 95 回研究大会』6 月 5 日、豊中：大阪大学.
4) ITO, Makoto 2015. "New Development or Transformation of the Bugis Association in Sabah, Malaysia." *The First Conference, Consortium for Southeast Asian Studies in Asia.* 12 December, Kyoto: Kyoto International Convention Center.
5) FUKUTAKE, Shintaro 2015. The Refugee and the Cross: Religion, Languages, and the Borderland in Timor Island. *Consortium for Southeast Asian Studies in Asia.* 12 December, Kyoto: Kyoto International Convention Center.
6) NAGATSU, Kazufumi 2014. "Ethnogenesis of the Bajau as a Maritime Creole and its Socio-ecological Contexts in Wallacean Sea, Southeast Asia." *International Union of Anthropological and Ethnological Sciences*. 29 May, Chiba: Makuhari Messe.
7) HONNA, Jun. 2014. Bringing Human Back In: Toward a New Paradigm of ASEAN-Japan Co-operation on Maritime Non-Traditional Security Challenges. *ISEAS-GRIPS Joint Workshop on ASEAN Japan Research Project*. 4 April, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
8) SODA, Naoki 2014. Indigenizing Colonial Knowledge: Ibrahim Haji Yaacob and Pan-Malay Nationalism. *IKMAS Seminar Series No. 4*. 3 March, Bangi: Institute of Malaysian and International Studies (IKMAS), Universiti Kebangsaan Malaysia.

〔図書〕（計 25 件）
1. 小野林太郎・長津一史・印東道子（編著）2018.『海民の移動誌―西太平洋の海域文化史』総ページ数 400、昭和堂.
2. 左右田直規 2018.「植民地史の換骨奪胎―イブラヒム・ハジ・ヤーコブとマレー史の再構築」（pp. 107-151）小泉順子（編著）『歴史の生成―叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』総ページ数 334、京都大学学術出版会.
3. 伊藤眞 2017.「高齢者の変貌―インドネシアの事例を中心に」（pp. 163-180）宮原曉他（編著）『＜シリーズ東南アジア地域研究＞社会』総ページ数 337、慶応大学出版会.
4. 加藤剛 2017.「『国家英雄』以前―『祖国』の創出と名づけをめぐって」（pp. 261-317）、山口裕子他（編著）『「国家英雄」が映すインドネシア』総ページ数 333、木犀社.
5. 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子（編著）2016.『小さな民のグローバル学―共生の思想と実践をもとめて』総ページ数 390、上智大学出版会.
6. 本名純 2014.『民主化のパラドックス―インドネシアにみるアジア政治の深層』総ページ数 224、岩波書店.
7. 福武慎太郎・堀場明子（編著）2013.『現場＜フィールド＞からの平和構築論』総ページ数 196、勁草書房.

６．研究組織
(1)研究代表者
長津 一史（NAGATSU, Kazufumi）
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676

(2)研究分担者
青山 和佳（AOYAMA, Waka）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：90334218

(3)研究分担者
伊藤 眞（ITO, Makoto）
首都大学東京・人文科学研究科・名誉教授
研究者番号：60183175

(4)研究分担者
加藤 剛（KATO, Tsuyoshi）
東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員
研究者番号：60127066

(5)研究分担者
福武 慎太郎（FUKUTAKE, Shintaro）
上智大学・総合グローバル学部・教授
研究者番号：80439330

(6)研究分担者
左右 田直規（SODA, Naoki）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：30345318

(7)研究分担者
本名 純（HONNA, Jun）
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：10330010